

国立国語研究所学術情報リポジトリ

文焦点 (Thetic) 文における主題標示とその条件の 再検討：宮崎県椎葉村尾前方言を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2025-01-31 キーワード (Ja): 九州方言, 琉球諸語, 情報構造, 類型論, アスペクト キーワード (En): 作成者: 廣澤, 尚之 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000471

文焦点（Thetic）文における主題標示とその条件の再検討

——宮崎県椎葉村尾前方言を中心に——

廣澤尚之

九州大学大学院 博士後期課程／日本学術振興会特別研究員／国立国語研究所 共同研究員

要旨

宮崎県椎葉村尾前方言では、文焦点（Thetic）文の一部で主語が主題助詞で標示される。筆者はこれまで、この際の条件を、①主語が文脈に既出であるか、②存在（Presentational）ではなく出来事を表す（Event-reporting）文であるとき、と記述してきた。本稿では追加調査の結果を踏まえ、主語を標示する形式の交替に、新たに述語のアスペクトが関与していることを報告する。

筆者はこれまでの研究で日琉諸方言の主語を標示する形式の交替原理を説明する「情報構造のクロスモデル」を提案してきた。今回このモデルに新たな変数（述語のアスペクト）を組み込み、改訂することを提案する。さらに、追加調査を通じて発見した新たな変数の候補についても簡単に報告する。*

キーワード：九州方言、琉球諸語、情報構造、類型論、アスペクト

1. はじめに

情報構造の研究では一般に、文全体が焦点となる文焦点（Thetic）は主題を持たないとされている（Lambrecht 1994, 2000）。しかし、宮崎県椎葉村尾前方言¹は、文焦点文の一部で主語が主題助詞を取ることがある（焦点部分を下線で示す）。以下の例で、(1a)は述語焦点構造、(1b, c)は文焦点構造の例であるが、(1c)で主題助詞ワが生じうる点に注意されたい。なお、助詞“ワ”は、(1a)に見るように、通常のトピックコメント構造（述語焦点構造）で義務的に生じる主題助詞である。“ノ”は主格助詞であり、“Ø”は無助詞（ハダカ）を表している。

- (1) a. 「タクシー來た？」と聞かれて
ハイヤー{ワ/*ノ/*Ø} 来タゼ。
「タクシー來たよ。」

述語焦点

*本研究はJSPS科研費23KJ1712「「判断文・現象文」類型における特殊構文の再検討：方言バリエーションに着目して」（代表者：廣澤尚之）の助成を受けている。本研究は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」（プロジェクトリーダー：山田真寛）の研究成果である。本研究は廣澤他（近刊）を土台とし、それを発展させたものだが、廣澤他（近刊）を含む論集の編集作業の遅れにより、本稿の方が先に公開されることをおことわりしておく。

¹ 宮崎県椎葉村尾前方言は宮崎県東臼杵郡椎葉村の西北部で話されている方言であり、話者人口はおよそ100人である。系統は未詳であるが、方言区画上は九州方言のうち豊日方言、その中でも特に日向北部方言に属するとされる（徳川ほか1994）。本研究のデータは80代女性1名のイディオレクトに基づく。断りのない限り全て筆者が調査したフィールドデータである。

- b. 不意にきたタクシーを見て
ハイヤー{ノ/*ワ/*Ø} 来タゼ。 文焦点
「タクシー來たよ。」
- c. 呼んだタクシーを待っていて、見つける。
ハイヤー{ノ/ワ/*Ø} 来タゼ。 文焦点
「タクシー來たよ。」

本稿の第一の目的は、尾前方言におけるこの現象の記述の精緻化である。加えて、以降の節でみていくように、一般に文焦点と解釈可能な環境においてこのように主題助詞が出現可能な方言が他にもみられることにも注目する。本稿の第二の目的は、どのような文焦点で主題助詞が出現可能かを通方言的に記述・説明するために筆者が提案した「情報構造のクロスモデル」を、尾前方言や他方言の最新の調査結果をもとに改訂することである。

本稿の構成は以下の通りである。2節では、尾前方言の文焦点（Thetic）において主題助詞が出現する条件について、従来指摘されてきた2つの変数を示すとともに、その変数をもとに筆者が提案してきた「情報構造のクロスモデル」について述べる。続く3節では、追加調査の結果発見した新たな変数（アスペクト）について述べるとともに、この新たな変数を盛り込んだ「情報構造のクロスモデル」（改訂版）を提示する。

2. 尾前方言に関するこれまでの論点

前節で述べたように、尾前方言では文焦点（Thetic）の一部が主語に主題助詞を取りうる方言である。本節ではこの問題に対するこれまでの研究をまとめた。以下2.1節では、文焦点（Thetic）という用語について整理する。2.2節、2.3節では先行研究にて指摘されてきた、尾前方言の文焦点（Thetic）が主題助詞を取りうる2つの条件をそれぞれ記述する。続く2.4節では、それら2つの条件を組み合わせた「情報構造のクロスモデル」を導入し、その通方言的な有用性を述べる。

2.1 文焦点（Thetic）について

尾前方言の詳細に立ち入る前に、本稿で重要な概念となる文焦点（Thetic）に関する用語の整理を行なっておく。前提との差異になる部分を焦点（下線で示す）と呼ぶとき、文は焦点の領域に基づいて述語焦点（2a）、項焦点（2b）、文焦点（2c）に分類できる（Lambrecht 1994: 222）。

- (2) a. 「車はどうしたの？」に対して
車は故障したよ。 述語焦点
- b. 「バイクが故障したの？」に対して
いや、車が故障したんだよ。 項焦点
- c. 「何が起きたの？」に対して
車が故障したんだよ。 文焦点

このうち、文焦点は通言語的に有標な形式（英語における *there* 構文など）を取りやすいことが知られている（Sasse 1987, 2006, Lambrecht 2000）。出現する文脈にも偏りがあり、Macías (2016) は (3) で示すような文を文焦点に挙げている（大文字は強勢を表す）。

- | | | |
|-----|---|----------------------------|
| (3) | a. There are three Tasmanian devils in the zoo. | 存在 (Existentials) |
| | b. It is snowing. | 天候 (Weather statements) |
| | c. HERE's John. | 提示 (Presentatives) |
| | d. My HEAD hurts. | 物理的感覚 (Physical Sensation) |
| | e. The POPE died. | ニュース (Hot news statements) |

談話の観点からは、しばしば先行文脈のない *out of the blue* な文と呼ばれ（Selkirk 1984: 217）²、談話に話題を導入する文であるとされる（Lambrecht 1994: 185）。文焦点は哲学、特に判断論では、Thetic judgement を表す文とされる。Thetic judgement は、主語と述語との対応関係で真偽が決まる通常の判断（Categorical judgement）と異なり、全体が分割しがたい 1 つの事態の認識である判断である（Kuroda 1972, Macías 2016）。焦点や判断の構造を言語形式とは独立に判定することは極めて難しく、文焦点（Thetic）の通言語的な同定基準は設定しがたいと言われるが（Sasse 2006）、本稿では通言語的に文焦点（Thetic）になりやすいとされている (3) のような文、特に存在・出現を表現する発見文 (3c) を文焦点（Thetic）の典型例とみなす。これらの文は日本語学で「現象文」（三尾 1948: 64, 仁田 1991: 122）や「存現文」（佐治 1991）と呼ばれる文に相当する。

2.2 文焦点（Thetic）における主題標示

尾前方言において文焦点（Thetic）が主題助詞を取りうることを最初に報告したのが三井（2020）である。三井（2020）では、文焦点（Thetic）ではなく「現象文」（仁田 1991: 122）という用語を使用し、以下の (4) のような現象文が主題助詞を取りうることを示している³。

- (4) タクシー{Ø/ワ/ガ/ノ} オッタ。
 (タクシーを探していて) 「あ、タクシーいた。」 (三井 2020 (1))

三井（2020）によれば、現象文であっても主題を持つ (4) のような文は、尾前方言では主語が主題助詞を取れるという。この研究は、文焦点（Thetic）が主題を持たないとする従来の常識を覆した重要な論文である。しかし、主題を持つ文なら主題助詞を取れる、という記述はほとんど同

² この点に関しては Sax (2012) の反論がある。

³ 筆者により表記をカナに改めている。本稿では扱わないが、以下のような疑問文の例も挙げている。

(i) タバコ{ガ/ノ/ワ/Ø}アルカイ。
 (道端で唐突に) 「タバコある？」 (三井 2020 (2))

語反復であり、主題助詞が出現する条件は十分に記述されていない。その問題を解決しようとした研究が Shimoji and Hirosawa (2022) である。Shimoji and Hirosawa (2022) は主題助詞が出現しうる条件は主語が活性化していることであると主張した。(4) の場合、「タクシーを探している」という発話場面では、談話の中で「タクシー」が活性化しており、そのことが主題助詞の出現を許していると分析される。しかし、以下の(5)を見ると、主題助詞の出現条件は必ずしも活性化の有無とは限らないことが分かる。

- (5)
- a. 家に遊びに来た友人が帰宅しようとしている。タクシーを呼んだが、なかなか来ない。友人と「タクシーいつ来るかな」と話している。
ア ハイヤー{ノ/ワ} ジョーセキ キタ。
(友人に) 「あ、タクシーちゃんと来た。」
 - b. 家に遊びに来た友人が帰宅しようとしている。タクシーを呼んだが、友人はそのことをすっかり忘れてバスの時刻表をみながら「いつに乗ろうかな」と話している。
ハイヤー{ノ/ワ} キタ。
(友人に) 「タクシー来た。」

活性化あり

活性化なし

(5b) では、少なくとも聞き手の中でタクシーが活性化しているとは考えられないが⁴、主題標示を許している。この事実は、Shimoji and Hirosawa (2022) の記述の不備を示唆している。この問題を踏まえ、筆者の一連の研究（廣澤 2023a, b, 廣澤他近刊）では、「主語が文脈に既出か否か」が条件であると分析している。(5) は活性化の有無といった聞き手の心理状態に関わらず、タクシーという指示対象が一度談話に登場していれば主題助詞を取れると説明される。

以上のように、文焦点 (Thetic) が主題助詞を取りうるときの条件として、先行研究ではまず主語の指示対象に対する活性化や先行詞の有無といった旧情報性に注目がなされてきた。

2.3 存在 (Presentational) と出来事 (Event-reporting)

筆者の一連の研究（廣澤 2023a, b, 廣澤他近刊）では、尾前方言で文焦点 (Thetic) が主題助詞を取りうるもう一つの条件として、文焦点 (Thetic) が（存在を導入するのではなく）「出来事そのものを導入すること」という条件を提案した。Lambrecht (1994: 144) によると、文焦点 (Thetic) には存在を導入する Presentational と出来事を導入する Event-reporting の下位区分がある⁵。Presentational は述語が「いる」のような存在動詞や「来る」のような出現を表す動詞であり (6a), Event-reporting は述語が主語の存在・出現だけでない、出来事の具体的なありさまについての情報を含んでいる (6b)。

⁴ 本稿では詳しく議論しないが (5b) は活性化の有無が話し手と聞き手では異なりうるという問題も提起する。

⁵ Sasse (1987) も同様の分類 (Entity-central と Event-central) を提案している。

- (6) a. あ, 太郎が{いる, 見える, 来る etc.}よ。
 b. あ, 太郎が{倒れてる, 踊ってる, 歌ってる etc.}よ.

Presentational

Event-reporting

尾前方言では、文焦点 (Thetic) のうち、Presentational (7a) は主題助詞を取らないが、Event-reporting (7b) は主題助詞を取ることができる。

- (7) a. 山道で急に信号を見つける。
 信号{ノ/*ワ} アッタフー。
 「信号があつたよ。」
 b. 山道で急に倒れた信号を見つける。
 信号{ノ/ワ} 倒レトルフー。
 「信号が倒れてるよ。」

Presentational

Event-reporting

2.4 情報構造のクロスモデル

文焦点 (Thetic) における尾前方言の主題標示は、(8)に示すような条件によって可能となることがわかつってきたと言える。

- (8) 尾前方言の文焦点 (Thetic) は、以下の①、②のいずれかの条件を満たすとき、主語が主題助詞を取りうる。
- ① 主語が文脈に既出である
 - ② 存在 (Presentational) ではなく出来事を表す (Event-reporting) 文である。

ここで、①と②の条件は互いに独立しているため、これらを掛け合わせることにより、文焦点 (Thetic) を2掛ける2の4通りに区分するクロス表を考えることができる。更に、②について、文焦点の2つに加えて、主語が問題なく主題で標示される述語焦点文 (Categorical Sentence) を加えると2掛ける3のクロス表になる (表1)。のちに見ていくように、このクロス表を想定することで、文焦点 (Thetic) における尾前方言の主語の主題表示にとどまらず、主語の標示に関する方言バリエーション (主格、主題、ハダカ) を統一的に説明・予測できる。これを「情報構造のクロスモデル」と呼ぶ (廣澤 2023a,b, 廣澤ほか近刊)。以下で、このモデルを詳しく説明する。

表1：「情報構造のクロスモデル」

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New			
Old			

それぞれのセルに当てはまる文がどのようなものか、以下では尾前方言の例を挙げて示す⁶。

(9)	不意にタクシーが来る。 ハイヤー／＼ 来タガ。 「タクシー来たよ。」	Presentational/New
(10)	予約したタクシーを待っている。 ハイヤー{ノ／ワ} 来タガ。 「タクシー来たよ。」	Presentational/Old
(11)	ふと部屋の時計を見上げると、針が進んでいない。 時計{ノ／ワ} 止マットルフー。 「時計が止まってるようだ。」	Event-reporting/New
(12)	出発前に道しるべにしようと話し合っていた信号機が倒れてい るのが見える。 シンゴーキ {ノ／ワ} タオレシャカ シタフー。 「信号機倒れてしまったようだ。」	Event-reporting/Old
(13)	ふと時計を見上げると針が進んでいない。 アノ 時計ワ 止マットルフー ⁷ 。 「あっ、あの時計止まってるようだ。」	Categorical/New
(14)	「タクシーもう来た？」と聞かれて答える。 ハイヤーワ モー 来タガ。 「タクシーはもう来たよ。」	Categorical/Old

尾前方言の主語が取る助詞をこのクロスモデルに従って整理すると、表2のようになる。

表2：尾前方言の主語の取る助詞

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	主格・主題	主題
Old	主格・主題	主格・主題	主題

⁶ (11)～(13)では、話者の方が「フー」(～ようだ)をつけて発話されたため、そのまま掲載している。なお、「フー」があってもなくても主語の取る助詞の振る舞いに影響はないことを類似の例文において確かめている。

⁷ (11)との違いは、「アノ」というダイクシス表現があることである。ダイクシス表現の有無によって Event-reporting/New と Categorical/New を分けることの妥当性については、廣澤他（近刊）を参照されたい。

このクロスモデルは他方言の記述でも有効である。以下の標準語, 鹿児島県いちき串木野市方言での調査結果を見られたい⁸。主語要素の新旧 (New vs. Old) は標準語でも串木野方言でも, Presentational と Event-reporting の違いは串木野方言において助詞の交替に関与している。

表 3 : 標準語の主語の取る助詞 (\emptyset はハダカを表す)

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格・ \emptyset	主格・ \emptyset	\emptyset
Old	\emptyset	\emptyset	主題・ \emptyset

表 4 : 鹿児島県いちき串木野市の主語の取る助詞

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	主格	主格・主題
Old	主格・主題	主題	主題

情報構造のクロスモデルは, 諸方言の助詞の分布に存在する二つの共通性を可視化している。第一に, 上述の尾前方言も含め, いずれの方言でもこのモデルの左上に位置する Presentational/New のセルの文は主語が主格助詞を取り, 右下に位置する Categorical/Old のセルの文は主語が主題助詞を取り。第二に, 主格助詞は Presentational/New から, 主題助詞は Categorical/Old から連続的に分布していく, それぞれの形式がせめぎ合っている。これを一般化すると, いずれの方言でも主格助詞と主題助詞は表 5 のような分布をし, 表 6 のような分布はしないのである。

表 5 : 助詞分布の通方言的一般化

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	\Rightarrow	\uparrow
Old	\downarrow	\Leftarrow	主題

表 6 : 予測しないパターン

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	主格	主題
Old	主題	主格	主題

⁸ 標準語は筆者内省, 串木野方言は筆者フィールドデータに基づく。具体的な調査例文は appendix を参照。

3. アスペクトの影響

本節では、上記の情報構造のクロスモデルに新たな観点（アスペクト）を盛り込む必要性を論じ、モデルを改訂する。

3.1 問題となるデータ

まず、改訂の根拠となる事実として、尾前方言のデータを検討してみたい。前述の通り、尾前方言では Event-reporting で主語が主題助詞を取りうるが、従来筆者が収集していた Event-reporting の例文はいずれも述語が「たまたま」結果相アスペクトのものであった。試みに述語が進行相アスペクトの例文を調査してみたところ (15a)、主題助詞が容認されないことが分かった。これはこれまで調査してきた結果相の例文 (15b) とは異なる結果である。

(15)	a.	電話が鳴ったので家人に伝える。 電話{ノ/*ワ}鳴リウォルゴタルガ。 「電話が鳴ってるみたいだよ。」	進行相
	b.	時計が止まっているので家人に教える。 時計{ノ/ワ}止マットルフー。 「時計が止まってるようだよ。」	結果相

(15) は述語のアスペクト以外にも主語や述語の動詞も異なるため、以下の (16) に主語や述語を揃えた擬似ミニマル・ペアの例を挙げる。

(16)	a.	夜寝ていると、ポタポタと水が漏れる音が聞こえる。 アラ ドッカ 水{ノ/*ワ} ポリオルゴタルガ。 「あら、どこか水が漏れているようだ。」	進行相
	b.	洗面台に溜めた水がなくなってしまってのに気づく。 アラ 水{ノ/ワ} ポットルガ。 「あら、水が漏れている。」	結果相

この結果は、従来のモデルに修正が必要なことを示唆している。すなわち、Event-reporting の文は常に無条件で主題助詞による主語標示を許すわけではなく、述語のアスペクトが結果相の時に限られるのである。以上を踏まえ、2.4 節の (8) で提示していた条件を以下の (17) に修正する。

(17)	本研究での提案	尾前方言の文焦点 (Thetic) は、以下の①、②のいずれかの条件を満たすとき、主語が主題助詞を取りうる。
------	---------	--

- ① 主語が文脈に既出である
- ② 存在 (Presentational) ではなく出来事を表す (Event-reporting) 文である。ただし、述語のアスペクトが結果相のときに限る。

3.2 モデルの改訂

2.3 節において、尾前方言の Event-reporting では、述語のアスペクトが進行相か結果相かによって振る舞いが異なることを示した。これを踏まえ、クロスモデルの Event-reporting を表 7 のように二分割することを提案する。この分割は、上述した助詞交代の通方言的な一般化（表 5）に異例を生じさせるものではない。

表 7：改訂版クロスモデルによる尾前方言の主語標示

	Presentational	Event-reporting		Categorical
		進行	結果	
New	主格	主格	主格・主題	主題
Old	主格・主題	主格・主題	主題	主題

Event-reporting/New におけるアスペクトの対立（例文 16）を再掲する。さらに Event-reporting/Old におけるアスペクトの対立を（18）に示す。

- | | |
|--|--|
| <p>(16) a. 夜寝ていると、ポタポタと水が漏れる音が聞こえる。
 アラ ドッカ 水{ノ/*ワ} ポリオルゴタルガ。
 「あら、どこか水が漏れているようだ。」</p> <p>b. 洗面台に溜めた水がなくなってしまってのに気づく。
 アラ 水{ノ/ワ} ポットルガ。
 「あら、水が漏れている。」</p> | Event-reporting/New
進行相

Event-reporting/New
結果相

Event-reporting/Old
進行相

Event-reporting/Old
結果相 |
| <p>(18) a. 水が漏れていた箇所を自分で塞いでみた。今晚は大丈夫かと耳を澄ませてみると、やはり水の漏れる音が聞こえる。
 ヤッパ マーダ 水{ノ/ワ} ポリオルフー。
 「やっぱりまだ水が漏れているようだ。」</p> <p>b. 栓の欠けたところを接着剤で塞いで、もう一回水を張ってみる。10分くらいしてもう一度見に行ってみる。
 ヤッパ 水{*ノ/ワ} ポットルガ。
 「やっぱり水が漏れている。」</p> | |

3.3 他方言での検証

本節では今回のモデルの改訂が他の方言の記述でも有効なのかを確認する。以下の例は南琉球宮古語与那覇方言の例である⁹。それぞれの形式について述べる。“ヌ”は主格助詞，“ヌドウ”は主格助詞に焦点助詞がついたもの，“ワ”（母音/i/のあとはヤで実現）は主題助詞である。この方言では Event-reporting の文において、主語が初出 (New) のときも (19)，既出 (Old) のときも (20)，述語のアスペクトが主語を標示する形式の交替に関与する。

(19)	a.	電話が鳴ったので家人に伝える。 電話{ヌ/ヌドウ/*ワ} ナリュー。 「電話が鳴ってる。」	Event-reporting/New 進行相
	b.	時計が止まっているので家人に教える。 時計{*ヌ/ヌドウ/ヤ} トウマリドゥウー。 「時計が止まってるよ。」	Event-reporting/New 結果相
(20)	a.	奥さんが電話を待っている。電話がかかってきた。 電話{ヌ/ヌドウ/*ワ} ナリュー。 「電話鳴ってる。」	Event-reporting/Old 進行相
	b.	今何時か隣の部屋に見に行ってくれと頼まれ、隣の部屋に見に行くと、針が進んでいない。 時計{*ヌ/*ヌドウ/ヤ} トウマリドゥウー。 「時計止まってる。」	Event-reporting/Old 結果相

与那覇方言の調査結果を示すと表 8 のようになる。この結果は、与那覇方言においても Event-reporting をアスペクトで二分する有効性を示唆しており、データの欠損がある Presentational/Old を除外すれば、2.4 節の表 5 で示した通方言的な助詞の分布原理にも沿っている。

表 8：改訂版クロスモデルによる与那覇方言の主語標示

	Presentational	Event-reporting		Categorical
		進行	結果	
New	ヌドウ	ヌ/ヌドウ	ヌドウ/ワ	ワ
Old	不明	ヌ/ヌドウ	ワ	ワ

のことから、情報構造のクロスモデルにおいて Event-reporting をアスペクトによって分割することには一定の合理性があると考えられる。今後の他方言での検証が待たれるところである。本

⁹ 筆者が実施した郵便調査に基づく。

稿では 2.4 節で標準語と串木野方言を取り上げているが、筆者内省によれば標準語ではアスペクトは変数にならない。串木野方言についてはこの点についてまだ調査が及んでいない。

3.4 アスペクトによる分割と時間性

上述したアスペクトによる分割を日本語学の文類型、特に叙述類型論（益岡 1987）の観点から検討する。叙述類型論では事象叙述 vs. 属性叙述を区別する¹⁰。事象叙述とは「花子が走った。」「犬が泳いでいる。」などの文で、属性叙述は「花子は学生だ。」「犬は可愛い。」のような文である。両者の違いには時間性が関わっており、時間の推移によって展開するか否かと、主格「が」 vs. 主題「は」の交替が連動するとされる（影山 2009, 2012 : iv）（図 1）。

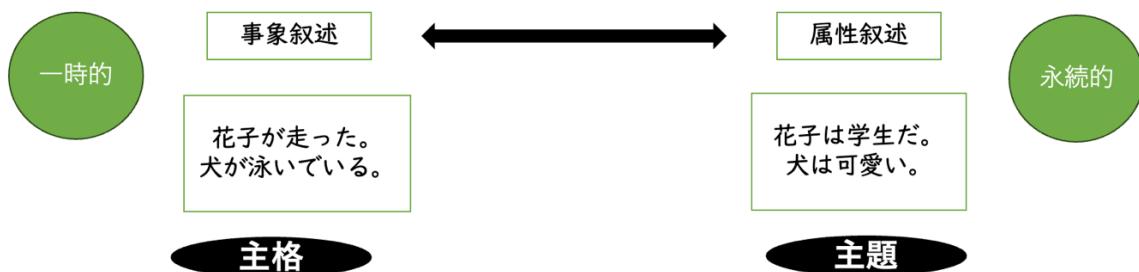


図 1：叙述類型論と時間性

本稿ではアスペクト、特に進行相と結果相の違いを問題にしてきたが、一般には進行相の方がより一時的であり、結果相の方がより永続的であると考えられる。時間的展開の有無と主格/主題交替が連動するという叙述類型論の見方を受け入れると、述語が進行相の方が主語は主格助詞を取りやすく、述語が結果相の方が主語は主題を取りやすいことが予測される（図 2）。



図 2：アスペクトと時間性

本稿で示してきた通り、実際に尾前方言や与那覇方言ではその予想に沿う結果が確認された。Event-reporting を進行相と結果相に分けた時、左側に進行相、右側に結果相を配置することは、単にそうすることによって提案してきた助詞分布の一般法則（主格助詞は Presentational/New から、

¹⁰ 佐久間（1941）や寺村（1973）の、物語文 vs. 品定め文、三尾（1948）や仁田（1991）の、現象文 vs. 判断文とも並行的な分類である。

主題助詞は Categorical/Old から分布) (表 5) に沿う結果となるからではなく、時間性の観点からも支持される整理と言える。

4. 今後の課題

今後の課題を 3 点述べる。1 点目に、今回提案した改訂版の「情報構造のクロスモデル」の有効性はまだ尾前方言と与那覇方言でしか検証されていない。今後調査地を増やして検証するとともに、新たな条件がないか探索していく必要がある¹¹。この過程で、アスペクトを更に分割したり（将然相と進行相で振る舞いが異なるなど）、Categorical の中でもアスペクトによる分割の必要が生じたり（結果相では主題助詞が許されるが継続相ではそうでないなど）する方言が見つかる可能性がある¹²。

2 点目に、情報構造のクロスモデルにおける New/Old の区別、特に何をもって旧情報とみなすかの基準を再考する必要がある。今回の追加調査において、主題助詞の出現が予想されない Presentational/New の例文において主題助詞が出現しているデータが散見された。それらはいずれも、主語が文脈に既出ではないが何らかの点で旧情報と見なせる可能性がある文脈で発話されていた。以下に具体例を示す。最初の例は探索の文脈で発話された例である。(21) の主語の「種」は文脈に既出ではないが、話し手の念頭にある、という意味で旧情報性があると言える。

(21) 種を買いたいと思って農協に行き、種を見つける。

コケー 種{ノ/ワ} アッタフー。

(独り言) 「ここに種あった。」

Presentational/New

次に、呼び止めの文脈で発話された例である。(22a) の主語の「筆入レ」は文脈に既出でも、現在念頭にあるわけでもないが、聞き手が忘れているものを思い出させている、という意味で旧情報性があると捉えられている可能性がある。なおこの主語の「筆入レ」は、話し手が聞き手のものであるという確信を持たない限り、主題助詞を取れない(22b)。

(22) a. 足元に聞き手の筆箱を見つけて呼び止める。

アレ 筆入レ{ノ/ワ} アル。

「あれ、筆箱がある。」

b. 足元に聞き手の筆箱を見つけて呼び止める。

アレ 筆入レ{ノ/*ワ} アルガ、ワレガトカイ。

「あれ、筆箱があるけど、あなたのものか？」

Presentational/New

Presentational/New

¹¹ 諸方言比較用の統一調査票(ver.1)をzenodoにて公開している。

(DOI : <https://doi.org/10.5281/zenodo.1263017>)

¹² 通方言的に Event-reporting 将然相<継続相<結果相<Categorical 将然相<継続相<結果相の順に主題標示されやすくなることが予想されるが、これを検証するためのデータは現時点ではいずれの方言に対しても無く、今後の課題である。

従来筆者は文脈に既出かどうかを New/Old の基準としてきたが、これらの例はこの基準の再考を促すものである。新情報と旧情報ははつきりと二分できるものではなく、多段的な概念である (Chafe 1984, Prince 1981, 1992, Lambrecht 1994, etc.)。今後 New/Old の基準の再検討と、それを可能にする調査例文セットの作成が課題となる。

今後の課題の 3 点目として、注 3 に挙げた疑問文の問題がある。すでに注 3 の (i) のような疑問文の各方言における特徴的な振る舞いについては調査に着手しているが、これについては別の機会に報告したい。

5. おわりに

本稿では、文焦点 (Thetic) における主題標示をテーマに尾前方言の記述と通方言的な一般化を行なった。2 節では尾前方言におけるこれまでの記述を確認するとともに、筆者が提案している通方言的な「情報構造のクロスモデル」を紹介した。3 節では、追加調査によって新たに述語のアスペクトが変数となっていたことを示すとともに、「情報構造のクロスモデル」にこの変数を取り込んで改訂することを提案した。4 節では新たな変数の可能性について、現時点のデータによって初期報告を行った。

参照文献

- Chafe, Wallace L (1984) Cognitive constraints on information flow. In Russell Tomlin (ed.) *Coherence and grounding in discourse*, 21–51. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 廣澤尚之 (2023a) 「宮崎県椎葉村尾前方言における情報構造」修士論文：九州大学。
- 廣澤尚之 (2023b) 「Thetic vs. Categorical の対立における Event-reporting 文の位置付け：日本語諸方言における主題助詞・主格助詞の出現と韻律句形成から」日本言語学会第 166 回大会。
- 廣澤尚之・松岡葵・下地理則 (近刊) 「方言変異からみる「ハもガも使えない文」—宮崎椎葉尾前方言、鹿児島串木野方言、標準語の対照を通して」竹内史郎・下地理則・小西いづみ (編) 『日琉諸語における情報構造と文法現象』東京：ひつじ書房。
- 影山太郎 (2009) 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136: 1-34.
- 影山太郎 (2012) 「まえがき」影山太郎 (編) 『属性叙述の世界』i - xiii. 東京：くろしお出版.
- Kuroda, Shige-Yuki (1972) The categorical and the thetic judgement evidence from Japanese syntax. *Foundations of Language* 9 (2): 153-185.
- Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form: Topic, focus and the mental representations of discourse referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lambrecht, Knud (2000) When subjects behave like objects: An analysis of the merging of S and O in sentence-focus construction across languages. *Studies in Language* 24:3. 611-682.
- Macías, Jose Hugo García (2016) From the Unexpected to the Unbelievable-Thetics, Miratives and Exclamatives in Conceptual Space. PhD dissertation: University of New Mexico.

- 益岡隆志（1987）『命題の文法 日本語文法序説』東京：くろしお出版。
- 三尾砂（1948）『国語法文章論』東京：三省堂。
- 三井桃子（2020）「宮崎県椎葉村尾前方言における主題標示の再検討—標準語との対照を通して—」
卒業論文：九州大学。
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』東京：ひつじ書房。
- Prince, Ellen F (1981) Towards a taxonomy of given-new information. In: Peter Cole (ed.) *Radical Pragmatics* 223-255. New York: Academic Press.
- Prince, Ellen F (1992) The ZPG Letter: Subjects, Definiteness, and Information-status. In: William C. Mann and Sandra A. Thompson (eds.) *Discourse Description: Diverse linguistic analyses of a fund-raising text* 295-325. Amsterdam: John Benjamins.
- 佐治圭三（1991）『日本語の文法の研究』東京：ひつじ書房。
- 佐久間鼎（1941）『日本語の特質』東京：育英書院。
- Sasse, Hans-Jürgen (1987) The thetic/categorical distinction revisited. *Linguistics* 25: 511–580.
- Sasse, Hans-Jürgen (2006) Theticity. In: G. Bernini & M. L. Schwarz (eds.) *Pragmatic organization of discourse in the languages of Europe*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Sax, Daniel J (2012) Not quite ‘out of the blue’? Towards a dynamic, relevance-theoretic approach to thetic sentences in English. In: Piskorska, Agnieszka (ed.) *Relevance Studies in Poland* 4, 24-53. Warsaw: Warsaw University Press.
- Selkirk, Elizabeth O. (1984) *Phonology and syntax: The Relation between Sound and Structure*. The MIT Press.
- Shimoji, Michinori and Naoyuki Hirosawa (2022) Shiiba (Western Japanese). In: Michinori Shimoji (ed.) *An Introduction to the Japonic Languages: Grammatical Sketches of Japanese Dialects and Ryukyuan Languages*. 293-329. Leiden: Brill.
- 寺村秀夫（1973）「感情表現のシンタクス：「高次の文」による分析の一例」『月刊言語』2-2. 東京：大修館書店。

Appendix

1. 標準語の主語標示

(23)	不意にタクシーが来る。	Presentational/New
	あっ、タクシー{ガ/Ø} 来たよ。	
(24)	予約したタクシーを待っている。	Presentational/Old
	あっ、タクシーØ 来たよ。	
(25)	電話がかかって来た。	Event-reporting/New 進行相
	あっ、電話{ガ/Ø}鳴ってるよ。	
(26)	ふと部屋の時計を見上げると、針が進んでいない。	Event-reporting/New 結果相
	あっ、時計{ガ/Ø}止まってるよ。	
(27)	家人が電話を待っている。電話がかかってきた。	Event-reporting/Old 進行相
	あっ、電話Ø 鳴ってるよ。	
(28)	家人に頼まれて隣の部屋の時計を見にいく。	Event-reporting/Old 結果相
	あっ、時計Ø 止まってるよ。	
(29)	ふと時計を見上げると針が進んでいない。	Categorical/New
	あっ、あの時計Ø 止まってるよ。	
(30)	「タクシーもう来た？」と聞かれて答える。 タクシー{ハ/Ø} もう来たよ。	Categorical/Old

2. 串木野方言の主語標示

(31)	不意にタクシーが来る。	Presentational/New
	タクシーガ 来タ。	
	「タクシー來た。」	
(32)	予約したタクシーを待っている。	Presentational/Old
	ア、タクシー{ガ/ワ} 来タヨ。	
	「タクシー來たよ。」	
(33)	ふと部屋の時計を見上げると、針が進んでいない。	Event-reporting/New 結果相
	アレ トケーガ トマッチョッ。	
	「あれ、時計が止まってる。」	
(34)	出発前に道しるべにしようと話し合っていた信号機が倒れているのが見える。	Event-reporting/Old 結果相
	シンゴーキワ タオレチヨラオ。	
	「信号機倒れてるよ。」	

- (35) ふと時計を見上げると針が進んでいない。
 アン 時計{ガ/ワ} 止マッチョッ。
 「あの時計止まってるよ。」
- (36) 「タクシーもう来た？」と聞かれて答える。
 モー タクシーワ 来チヨッド。
 「もうタクシーは来てるよ。」

Categorical/New

Categorical/Old

3.与那覇方言の主語標示（本文で提示した Event-reporting の例文を除く）

- (37) 庭で急に蛇をみつける。
 アバ！ パヴヌドウ ウー。
 「あっ蛇がいる！」
- (38) 蛇を探していて、見つける。
 ウヤ！ パヴ！
 「あっ！蛇！」
- (39) 電話がかかって来た。
 電話{ヌ/ヌドウ} 鳴リュー。
 「電話が鳴ってる。」
- (40) ふと部屋の時計を見上げると、針が進んでいない。
 時計{ヌドウ/ヤ} トマリドウウー。
 「時計が止まってる。」
- (41) 家人が電話を待っている。電話がかかってきた。
 電話{ヌ/ヌドウ} 鳴リュー。
 「電話鳴ってる。」
- (42) 家人に頼まれて隣の部屋の時計を見にいく。
 時計ヤ 止マリドウウー。
 「時計止まってる。」
- (43) ふと時計を見上げると針が進んでいない。
 カヌ 時計ヤ 止マリドウウー。
 「あの時計止まってる。」
- (44) 「探してた蛇いた？」と聞かれて答える。
 ン一 パッヴア (パヴ=ワ) ウータムン。
 「うん、蛇いたよ。」

Presentational/New

Presentational/Old

Event-reporting/New
進行相

Event-reporting/New
結果相

Event-reporting/Old
進行相

Event-reporting/Old
結果相

Categorical/New

Categorical/Old